

## 第25回 夏の講演会・講習会を開催しました!!

8月20日（火）、21日（水）に大阪府立生野聴覚支援学校と同志社大学・良心館を会場に、第25回夏の講演会・講習会を開催しました。会場が異なる場所での開催でしたが、多くの方に参加していただき、活気あふれる会になりました。参加されました皆さまからお寄せいただいたアンケートからの感想を交えて、第25回夏の講演会・講習会の様子を報告いたします。

令和6年 8月21日（水）会場：同志社大学 良心館

### ○講演『聴覚障害児の教育・指導・支援～個性化と社会化の発達を促す～』

澤 隆史 先生（東京学芸大学 総合教育科学系 教授）



- ・聞こえない子どもの気になる様子、日本語力の自己評価と実際の力との違いがある子ども、実体験とのズレなど、自分が指導していても感じる点、共感できる面があり参考になった。
- ・考えようとしていない子どもについて、共感するところがたくさんあった。日常生活での数量推定の研究が興味深かった。コミュニケーションの大切さについて、再認識しました。先生と子どものコミュニケーションが充実するためには、先生同士のコミュニケーションも大事だと思った。
- ・思考停止ワード「べつに、普通、多分」確かに、よく子どもたちから聞くワード。思考停止を意味していたのか…とわかった。学力はそこそこあるけれど、コミュニケーションが苦手と言った子どももあり、その部分を育てるために、できることはなにか。思考を引き出す方法は何か…。授業（子どもとの関わり）のなかで、発問などの工夫をしていくことで育てられるとあったので、生活のなかで試していきたいと思った。
- ・今後の予測不能の社会を生きていくためには、答えのない問いを教師が積極的に出していく必要があると話聞いていて、とても感じた。難聴児と関わる際には、分かるコミュニケーションを充実させていく必要がある、そのような幼児・児童と関わる身として、どうすれば分かってもらえるのかを絶えず考えていきたいと思う。
- ・子どもの論理的思考と生活体験での推論のズレの課題は、日本社会全体の課題でもあると感じた。
- ・澤先生の話し方に親しみ感があり、話を聞きやすく、とてもよかった。自分の主観と客観のズレであったり、個性化と社会化のアンバランスであったり、子どもの見方を見ていくこと、確認していき、子どもが気付いていないところに、意識をもたせる方法を考えていく大切さを考えることができた。
- ・難聴児の推測する力のなさは、経験値や繰り返すことで補う必要があることを再度学んだ。

令和6年 8月21日(水) 会場:同志社大学 良心館

○講習会Ⅲ『難聴児支援に係る中核機能について』

三反田 多香子 先生(和歌山県 乳幼児きこえとことば相談 相談員)

- ・難聴児支援に係る中核機能が各府県で機能していき聴覚障害児の保護者支援をされていること、ろう学校の役割や連携のあり方を今後も情報交換しつつ、発展した形になることを願う。
- ・広域的に相談にまわり、寄り添って支援されているのだと思った。
- ・難聴児支援の中核機能モデル事業の経緯と取り組みについてよくわかった。県下の聴覚特別支援学校のネットワークをつくり、医療や福祉との協働をすすめる取り組みをしながら、今できることを頑張りたい。
- ・和歌山では、乳幼児の保護者と関わりのある保健師と連携されていて、保護者の立場からみて相談できるところに繋がることができ、安心感のある取り組みをされていると感じた。一件一件丁寧に関わっている和歌山の取組が他府県も同じようにできたらいいと思う。
- ・聾学校で働いている私たちの専門性を必要としている難聴児とその保護者の方はたくさんいるように感じ、その専門性を必要としている人達に伝えていくことも私たちの使命であるように感じた。



令和6年 8月21日(水) 会場:同志社大学 良心館

○講習会Ⅳ『聴覚障害のある生徒の思春期と言語運用・自己開示

～多様な教育現場で、大切にしたい視点と関係性～』

高井 小織 先生(京都光華女子大学 福祉リハビリテーション学科 准教授)

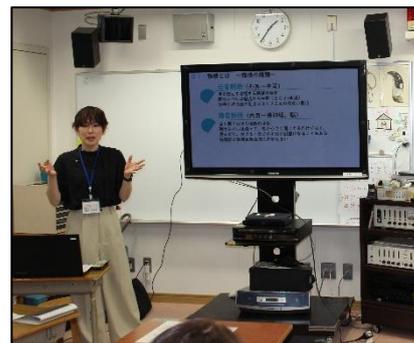
- ・生徒さんとのやり取りが印象深かった。失敗したから次は失敗しないように考えて行動する。認知的な葛藤は楽しい物だと言うこともおっしゃっていた。何か今まで、聞こえにくい子どもが、自分の聞こえについて話ができるようになって支援していた。でも、失敗できる場(自分で責任をとれる)について考えていきたいと思った。
- ・子どもと対話を行うとことで、気持ちや言葉を発言したときに、内容をメモして、文章にしていき、子どもにフィードバックを行う。アウトプットとインプットを上手に活用し、子どもに対話をする、言葉を広げさせる経験を豊かにする重要性を考えることができた。また、音読は、発音ではなく音韻意識ということも、今後の参考になった。
- ・難聴学級は地域によって異なり、様々な形態があることを知った。一人ひとりの「きこえ」が環境・相手・状況によって異なることを理解し、子どもたちと誰かを繋ぐ役の自覚を持って日々関わっていききたい。
- ・発達段階にあった言語指導をしていくために、対象児がどの発達段階にいるのかを客観的に評価して指導する必要があると感じた。



令和6年 8月20日(火) 会場:大阪府立生野聴覚支援学校

### ○聞こえのしくみと聴力測定

- ・オーディオグラムの見方など基本的な内容や難聴、人工内耳の擬似体験もあり有意義だった。
- ・機械を実際に触りながら聴力測定の体験をできたのが貴重な経験でよかった。オーディオグラムや聞こえ方の例を知り、聞こえについての理解が深まった。今回の講座を生かしながら、今後聴覚障がいのある人との関わりや授作りに工夫できたらいいと思う。



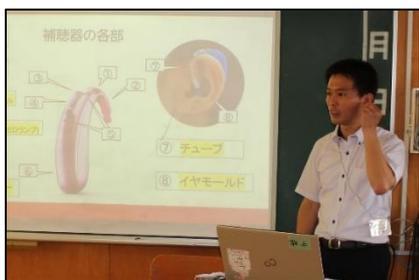
### ○補聴器のフィッティング

- ・実践を踏まえて、フィッティングの方法や気をつけなければならぬことを学んだ。
- ・同じ聴力を入れても処方方式?フィッティング法によって音の違いがあることを自分の耳で体験できた。音の入り方を少し調整するだけでも聞こえ方が違う事を実感できた。自分の聞こえ方を訴えられない乳幼児にとって、普段の様子をしっかりと見て、時間をかけて調整をしていくという意味が良くわかった。



### ○難聴学級での取り組み・指導

- ・支援方法や、子どもの実態把握の方法があるのかと、取り入れてみたい内容を知ることができた。また、子どもたちが自己理解を深めること、そして他者に配慮などを求めたり感謝を伝えたりする力をつけてあげることの大切さを改めて実感した。



### ○補聴器のしくみと保守管理

- ・補聴器の仕組みについて改めて学ぶことができて良かった。補聴器も進化を知り、保守管理についても再確認できた。
- ・日頃、補聴器・イヤーマールド・電池チェッカーなど直接触れて、わかりやすく知ることができた。

### ○地域支援

- ・実践的な内容を学ぶことができた。
- ・具体的にどのように支援をしているのか、また他の機関とどのように連携をとっているのかがよくわかった。参考にしたい。



### ○人工内耳の基礎・応用

- ・人工内耳の見本と頭蓋骨の断面が見られたのは、とてもわかりやすくよかった。他のお話も専門的なのにわかりやすかった。
- ・人工内耳のマッピングの方法や手順、マップの読みとり方などについて、さらに詳しくお聞きしたいと思った。



## ○障害認識

- ・自分らしくいられる場、嫌なことをどう楽にするかを考えることが大切だと聞き、この考えを生徒にも伝えていきたいと感じた。
- ・同じ聴覚障害の方でも、その方の考え方や性格、育った環境によって認識の経緯も困り事への対応方法も違うことがわかった。これから子ども達と関わる時に、ひとりひとりの性格や考え方等、その子の色々な側面を理解して関わることを大切にしたい。



## ○幼稚部自立活動

- ・活動の配慮やポイントが示してあったので、自分が保育をする時はもちろん、経験の浅い教師に説明する時にも役立つと思った。暗黙知はとてもよくわかる。経験やセンスも兼ね合わせているので、本当に難しいと感じる。
- ・伝承遊びなど、昔ながらの物を取り入れながら個々の課題に迫ったねらいがあり、参考になった。



## ○補聴援助システム

- ・ロジャーの長所、短所を実際に装用しながら確認できて良かった。担当する生徒についての相談にも具体的にアドバイスいただき、実際に行ってみたいと思う。

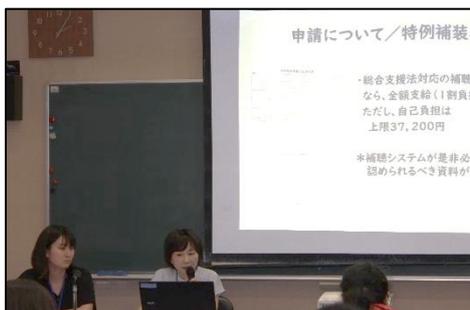


## ○補聴器の特性とオーディオグラム

- ・午前の講座を生かしてオーディオグラムについて詳しく知ることができた。補聴器や人工内耳をしているからといって絶対聞こえやすくなるわけではないことや、高さなどによっても違いが出てくるのが分かった。今後の聞こえの実態の把握がしやすくなる内容だと思った。

## ○乳幼児の教育相談

- ・社会の変化に伴い、保護者の質も大きく変わってきていて、こちらの意図がうまく伝わらないことがあると感じている。早期の教育相談(0歳から2歳)は親子の関わりが大事で、そのためには母が楽しいと思える環境であること、母自身が変わってきたなど気付けるように、子供の成長を伝え一緒に成長できる、そういった場所がとても大切だなと感じた。



## ○聴覚障害にかかわる福祉制度

- ・きこえない人に関する福祉制度にどのようなものがあるのか、たくさんあって覚えきれない、きこえない当の本人も全て理解するのは難しいかもしれない、だからこそ、学校側からもきちんと情報提供できるように、把握しておく必要があると感じた。

## ○重複児への指導

- ・子どもとの関係を作り上げるために、こちらのルールを押し付けない、子どもが見ているもの、感じていることを知る、一緒に同じことをすることで関係を作る、子どもに頼りにされる存在、安心してもらえる存在になる、これらを心において、関わりたいと思う。
- ・どの子に対しても安心して過ごせる環境が大切であることを改めて感じた。



## 〈今後の予定〉

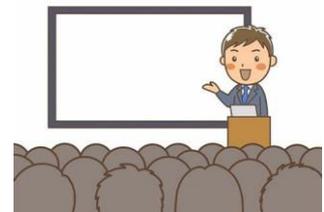
- 10月下旬 秋の講演会案内発送、機関紙87号発行
- 11月30日(土) 秋の講演会(大阪府社会福祉会館)

講師 松森 久美子 先生(相模女子大学 学芸学部こども教育学科 特任准教授)  
演題 『軽度難聴児や人工内耳装用児の聴覚活用と自己理解』

- 12月上旬 冬の学習会案内発送、機関紙88号発行

(令和7年)

- 1月24日(金) 第3回代表委員会(京都府立聾学校)
- 1月25日(土) 冬の学習会(京都市)



講師 喜屋武 睦 先生(福岡教育大学 教育学部特別支援教育研究ユニット)  
演題 『聴覚障害児における韻律情報の活用 ~言語及び社会情動面から~』  
講師 芦田雅哉 先生(京都府立聾学校舞鶴分校 首席副校長)  
演題 『集う・つながる・創り出す ~舞鶴分校が目指す地域との連携・協働とは~』

- 3月下旬 集録第25号発行、機関紙89号発行

### 近畿教育オーディオロジー研究協議会事務局

〒670-0012

兵庫県姫路市本町 68 番地 46

兵庫県立姫路聴覚特別支援学校内

TEL:079-284-0331

FAX:079-222-5237

メール:kinkieaa@gmail.com